

殿様というのはどうも、世のの様子や周りの人々の心情にあまり明るくなく、わがままで、ぜいたくというイメージがあります。落語の「桜鯛」・「ねぎまの殿様」・「将棋の殿様」などでも、そんな殿様たちが登場します。しかし、その実像は赤字財政に苦慮し、自ら質素儉約に励み、常に周囲への気配りを欠かせない、気苦労の多い日常だったのです。

悲運の鳥居家

慶長5(1600)年、関ヶ原の戦いの前哨戦で、徳川家康に託された伏見城を守り、激戦の末、討ち死にした鳥居元忠。彼は13歳の時、駿河今川氏の人質であった10歳の家康(当時は竹千代)に近侍して以来、忠勤に励みました。子の忠政は、父の勲功により出羽国山形22万石を領しますが、3代忠恒(末期養子違反)・4代忠春(家臣に斬られた傷で死亡)・5代忠則(家臣への監督責任を問われ謹慎中に急死)と続けて御家断絶の危機にみまわれます。特に忠

恒・忠則の場合は領地没収。しかし元忠の旧功を考慮し、跡継ぎへ家督相続が許可されました。そのため6代忠英の所領高は1万石へ激減しますが、若年寄になると正徳2(1712)年、下野国壬生藩木県壬生町へ3万石で入封します。

壬生藩財政の窮迫

8代忠意は奏者番・寺社奉行、若年寄などを経て、天明6(1786)年、老中に出世。その華やかな立身の陰で、藩の財政は支出増大による赤字に転落します。明和4(1767)年の藩收支予算はかなり厳しいもので、1万400両余という巨額赤字を計上。藩では補填のため、借金返済の停止や上方にある藩領からの金子の活用、壬生城下の商人や勝手方御用を務める名主などに対して御用金を課して、どうにか赤字を約970両まで圧縮しました。

大和田村名主斎藤家

大和田村(現大和田)は、壬生藩

の飛地領「山川領」に含まれ、斎藤家が代々名主役と藩の勝手方御用を務め、多額の御用金を用立てた功績により苗字帯刀が認められていました。斎藤家が藩に融通した正確な金額は不明ですが、明和4年には元金合計が4千両を超え、利息合計も900両以上でした。この膨大な元利返済に苦慮した藩は、当主の斎藤所左衛門を壬生城御殿に招き料理を振る舞



▲斎藤所左衛門加増申渡書(大和田斎藤家文書)

い、鳥居家の家紋入り上下を贈ります。さらに、藩主居間での御目見を許し、給人格(家臣待遇)の250石取りとしますが、3万石の壬生藩では年寄・家老に次ぐ高禄であり、所左衛門はまさに上級家臣待遇でした。

時代は明治へと変わり、藩が消滅しても鳥居家と斎藤家との関係は続きます。旧藩主鳥居忠文は外交官・貴族院議員となり、斎藤家は萬助が自由民権運動で活躍します。この頃から斎藤家は家産改善のため、鳥居家へ繰り返し返済要求を行います。そのたびに忠文本人や執事が猶予を願い出る状況でした。結局、明治40(1907)年、一部の返済が行われたことで萬助の子染治が「貴家(鳥居家)ト祖先(斎藤家)トノ旧恩深キニ鑑ミ」残りは放棄しました。三和資料館では6日(土)から9月1日(日)まで、館蔵資料展「大和田斎藤家文書の世界」下野壬生藩の財政を支えた名主家」を開催します。ぜひ、ご観覧ください。

三和資料館学芸員 白石謙次

【児童書/読み物】

マリはすてきじゃない魔女

柚木麻子 著

11歳の魔女・マリは「魔法は自分のために使ってはいけない」というきまりを忘れ、ジャムドーナツを巨大化させたから学校中が大騒ぎ！

大人たちは、人の役に立つ「すてきな魔女」になりなさいというが…。

出版社…エトセトラブックス

【絵本】

さいこうにさいこうのプレゼント

ペトル・ホラチェック 作

今日はカルロとロールカの誕生日。ふたりはプレゼントを贈りあいます。「本当は宇宙をあげたいんだ」とロールカ言うと、カルロ「ぼくは、できたら海をあげたい」と言います。でも、さいこうにさいこうのプレゼントは…。

出版社…化学同人

【一般書/小説】

まぼろしを織る

ほしおさなえ 著

母の死により生きる意味を見い出せなくなった槐は、職も失い、川越で染織工房を営む叔母の家に居候していた。そこに、従兄弟の倫も同居することに…。生き物の命から生まれる糸と、女性画家の死の謎が織りなす再生の物語。

出版社…ポプラ社

【一般書/随筆】

静かに生きて考える

森博嗣 著

世の中は騒々しく、人々が浮き足立つ時代になってきた。そんなやかましい時代を、静かに生きるにはどうすればいいのか？ 人生を幸せに生きるとはどういうことか？ 作家・森博嗣が自身の日常を観察し、思考したエッセイ。

出版社…ベストセラーズ

図書館の本棚から



古河図書館

ファインダー越しの昭和時代

Time Travel Photographer

七夕祭り 昭和31年7月

七夕祭りでにぎわう横山町の柳通り。当時、人の移動は徒歩か自転車でした。通りの一角には演芸用のステージがあり、夜の演奏のためにバンドのお兄さんたちが楽器を運んでいます。

古河市在住写真家
鈴木路雄さん

